第１１回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者　上村　勝彦

東京大学教授

第１１回中村元東方学術賞審査委員会報告
審査委員長　前田專學（東方研究会常務理事）
２００１年１０月１０日インド大使館

さて、本日十月十日は、中村元初代理事長の三回忌に当たります。この機会に、財団法人東方研究会では、従来インド大使館と共同主催にて学術及び文化活動のすぐれた業績を世に広く顕彰するために授与して参りました「東方学術賞」を、中村元先生の三回忌の記念の事業として、「中村元東方学術賞」と改めて復活させることになりました。

「中村元東方学術賞」審査委員会は、つぎの十名の委員から構成されております。奥田清明四天王寺教学研究所長、川崎信定東洋大学教授、木村清孝鶴見大学教授、三枝充悳筑波大学名誉教授、高崎直道鶴見大学学長、田辺和子名古屋大学講師、田村晃裕東洋大学名誉教授、奈良康明駒沢大学名誉教授、原實日本学士院会員、それに委員長の私、前田專學でございます。

これらの委員の先生方の他に、過去十回にわたりまして東方学術賞を受賞された方々にも、もっとも「中村元東方学術賞」に相応しい功績のある研究者の推薦方をお願いし、それらのご意見が出揃った去る七月九日（月）、神田明神の一室を借りまして、中村元東方学術賞選考委員会を開催致しました。諸先生から推薦された研究者は、十六名に及び、推薦された研究者は、それぞれにすぐれた業績を挙げられており、選定は困難を極めましたが、慎重審議の結果、皆様にご報告申し上げましたように、第一回の中村元東方学術賞、通算第十一回の（中村元）東方学術賞を

上村勝彦（昭和十九年生まれ、東京大学教授）と
立川武蔵（昭和十七年生まれ　国立民族学博物館教授）

のお二方に差し上げることに決定致しました。

さて、そのお二方の授賞理由を申し上げますが、最初に上村勝彦先生の授賞の理由を申し上げます。

上村勝彦博士の専門領域は、サンスクリット古典文学の重要な学問分野である詩論であります。詩論は、インドにおきましては、アランカーラ（alaṅkāra）と呼ばれております。この術語は、狭い意味では修辞法を意味し、具体的には直喩（upamā）や隠喩（rūpaka）などの詩的技法を指しています。詩論は、古典インドにおいては、伝統的に、ヴェーダ学、哲学などとともに学ばれるべきものとされて参りました。

上村勝彦博士は、この難解きわまる領域に敢然と挑戦し、これまでの長年の研究成果を立派な二冊の著作として公刊されました。その一つは、一九八八年に学位請求論文として東京大学に提出された『インド古典演劇論における美的経験―Abhinavagupta の rasa 論―』（東京大学東洋文化研究所報告、一九九〇）であり、今一つは、『インド古典詩論研究―アーナンダヴァルダナの dhvani 理論―』（東京大学東洋文化研究所報告、一九九九）であります。

最初の『インド古典演劇論における美的経験― Abhinavagupta の rasa 論―』は、紀元一〇〇〇年前後にカシュミールで独自のシヴァ教神学を完成した巨匠アビナヴァグプタの rasa 論を解明した研究であります。本書の表題で「美的経験」と訳されたラサとは、本来味覚で味わう「味」を意味しますが、文芸理論においては、芸術作品により鑑賞者の意識に覚醒せしめられる普遍性をもった美的感動のことであります。著者は、東大助手のころ、マドラス大学に留学され、当時古典詩学の最高権威として世界的に著名なラガヴァン博士（V. Raghavan）と言語理論の卓越した研究者であるラジャ博士（K.K. Raja）から直接指導を受けて基礎を固め、日本でその成果を熟成させた労作であります。

二番目の著作『インド古典詩論研究―アーナンダヴァルダナの dhvani 理論―』は、九世紀後半のカシュミールの人アーナンダヴァルダナが著した詩論書『暗示の解明』（*Dhvanyāloka*）の研究であります。「暗示」（dhvani）とは、鑑賞者にラサを味わわせるために詩文に込められた働きであります。著者は、本書の第一部で、原典の記述にそって、問題点を逐次検討し、詳細に考察し、第二部においては、アビナヴァグプタによる注釈を随所で参照しつつ、この難解な原典『暗示の解明』を全訳し、詳細な訳注を施しています。

これら二冊の上村博士の著作によって、「美的経験」（ラサ）理論とそれを表出する手段である「暗示」（ドヴァニ）理論という、インド古典詩論において最も重要な二つの理論について、日本では初めての体系的な解明が成し遂げられたのであります。

上村博士は、専門分野としての詩論の研究を進めておられるばかりでなく、日

本においてインド古典に関する啓蒙活動をすることを、研究者としての自らの使命であると確信しておられ、その確信に基づいて、数々の古典作品を一般人の目に触れるようなかたちで翻訳し出版しています。

まず詩論に隣接するサンスクリット美文学の分野では、恋愛の悦びと苦しみ、そして宗教生活へのいざないを詠う詩集を訳した『インドの詩人―バルトリハリとビルハナ―』（春秋社、一九八二）を挙げることができます。『インド詩集　夢幻の愛』（春秋社、一九九八）は同書の改訂版であります。

インドの美文学は宮廷の庇護のもとに発達しましたが、上村博士は政治理論書の分野でもすぐれた業績を残しておられます。カウティリヤ著とされる『実利論』（*Arthaśāstra*）の翻訳（上下、岩波文庫、一九八四）がそれであります。本書は、王子の教育、行政府の構成、種々の経済活動を奨励し規制する法律、犯罪の取締りと刑罰、外国との戦争と講和といった、国家運営のあらゆる方策を網羅した帝王学の百科全書であります。その他、『実利論』のうちの特に政略論的部門を中心とした綱要書である『ニーティサーラ』（*Nītisāra*、〔東洋文庫五五三〕平凡社、一九九二）や、『実利論』の影響のもとに巧みな処世術を語る動物寓話集の代表作である『パンチャタントラ』（*Pañcatantra*、〔アジアの民話一二〕共訳、一九八〇）や、死体に宿る霊が勇敢な王に機知に富んだ話を語る中世の伝奇物語である『屍鬼二十五話』（*Vetālapañcaviṃśatikā*、〔仏教説話体系一四〕すずき出版、一九八二）などの、著名なサンスクリットの著作を、平易な日本語で訳出し、一般読者に提供しておられます。

ヒンドゥー教の分野では、上村博士は一般向けの解説書として『インド神話』（東京書籍、一九八一）を著し、ヒンドゥー教全般の選文集として『インドの夢　インドの愛』（共編著、春秋社、一九九四）を編集されました。またヒンドゥー教のバイブルといわれる『バガヴァッド・ギーター』（岩波文庫、一九九二）を、新しい立場から平易な日本語に翻訳し、『バガヴァッド・ギーターの世界』（NHK出版、一九九八）によって、一般の日本人が『バガヴァッド・ギーター』のうちに展開されたヒンドゥー教の教義に親しめるようにされました。

さらに上村博士は初期仏教にも深い造詣をもち、仏陀の前世物語を集めた『ジャータカ全集』全一〇巻の中の第七巻（春秋社、一九八八）、及び原始仏典のうちでもとりわけ重視され、広くアジア諸国で愛唱されている『法句経』（*Dhammapada*、筑摩書房、一九八七）の翻訳を出版されました。

以上のように上村博士は、インド人の鋭敏な知性と感性により高度に発達した詩論の分野に分け入って前人未到の研究業績を挙げられたことは、特筆すべき博士の功績であります。それとともに古典インド世界における文化と宗教の幅広い

分野における翻訳出版活動によって、日本でインド古典に関心をもつ層の裾野を広げるのに大きく貢献していると言うことができます。以上のことこれらの理由から、上村勝彦博士の業績は、中村元東方学術賞に相当するものと判断されます。